

青木健作 あおきけんさく

あ
お

き

けん

さく

周南市
(1883~1964)



【著作】

『お絹蛇』
(現代文芸叢書 大正2・春陽堂)『青木健作短編集』
(昭和3・春陽堂)

『明治文学全集』第75（昭和43・筑摩書房）ほか

周南市に生まれた青木健作は、明治末年から大正時代にかけて、新進作家として活躍した。その愛郷の心情を底流にした詩情豊かな作風は貴重で、近代文学史上逸することができない。

漱石は彼の代表作「虻」(明治四十三年(一九一〇))を、「名声ある大家の作と比べて遜色のないもの、あるいはある意味からいって、それよりすぐれているもの」(『東京朝日』)と賞賛している。健作文学の魅力は、故郷の土臭い自然の中に生きる健康で誠実な農民たちへの純粹愛を、ただひたすらに描き続けたところにある。

彼は東京大学の学生として上京し、「東京は西洋文明に侵され、卑俗に満ちている」などと言いつつも、「都会」か「田舎」かの問題で苦悩する。それを文学の世界で追求しようと願い、評論「真実なる人生と文芸の対境」（明治四十一年（一九〇八））と、処女作「鼯鼠（いたち）」（明治四十二年（一九〇九））を発表する。彼はまさに「田舎者」的文学を志向した作家であった。

健作の作品は約四十編あるが、そのほとんどが周南市や山口県を舞台にしたものである。彼が郷土の素朴な自然の中で、黙々とたくましく生き抜いている人々に、いかに温かい愛と同情の眼を注いでいるかがわかる。



『お 絹』

(文・桑原伸一)



永源山公園（周南市）に建つ文学碑

力かぎりわが打つ杭のぐいぐいと大地にふかくくひ入るうれしさ

嘗て自分は實感をそのまゝにこんな歌を詠んだことがある。生來の田舎者で、どうしても都會生活や都會人に感興と共鳴とを見出し得ない自分には、創作の筆を執り初めた當時から、土臭い田舎が常に想像の對象であつた。無論田園文學とか、郷土藝術とかいふやうな六つかしい傾向や主義を意識してゐた譯ではない。田舎の自然や人間でなければ自分の創作慾を刺戟しないからであつた。殊に自分にとつては、物心ついてから、二十すぎまで、機會さへあれば、その土や森や山や川と親しみ、そしてそれと共に樂しみ共に苦しみもした郷里——山口縣の一地方——は殆ど唯一の題材だといつてもよい位である。

『青木健作短編集』 跋から

青木健作 年譜

（提供・桑原伸一）

明治16（一八八三年）	11月27日、山口県東濃郡富田村河内（現・周南市）に生まれる。父は農業（後、村長）の青木利作、母サツの三男。	昭和10（一九三五年）	五二歳
明治32（一八九九年）	山口県尋常中学校徳山分校から本校の山口中学校四年に進学。山頭火と同級になる。	昭和18（一九四三年）	六〇歳
明治34（一九〇二年）	山口高等学校入学。「如月会」に入り、短歌に没頭。郷里に「紫南会」を作り文化活動に専念。	昭和21（一九四六年）	六三歳
明治38（一九〇五年）	東京帝国大学文科大学哲学科（美学専攻）入学。同好の士と、俳諧に凝る。	昭和28（一九五三年）	七〇歳
明治41（一九〇八年）	同大学卒業。評論「真実なる人生と文芸の対境」（『帝国文学』）を発表。	昭和29（一九五四年）	七一歳
明治42（一九〇九年）	処女作「鼯鼠（いたち）」（『帝国文学』）を発表。千葉県成田中学校の教師となり赴任。教頭に鈴木三重吉がおり、その影響を受ける。	昭和32（一九五七年）	七四歳
明治43（一九一〇年）	「虻」（『ホトトギス』）が夏目漱石から『東京朝日新聞』の文芸欄で賞賛される。「山鳴」（『帝国文学』）を森田草平が同紙で推賞。	昭和34（一九五九年）	七六歳
明治45（一九一二）年	玖珂郡高森村（現・岩国市）の田村静子と結婚。『読売新聞』に「お絹」を連載。好評を得た。	昭和35（一九六〇年）	七七歳
		昭和37（一九六二年）	七九歳
		昭和39（一九六四年）	八一歳

11月27日 山口県都濃郡富田村河内（現・周南市）に生まれる。父は農業（後、村長）の青木利作、母サツの三男。

山口県尋常中学校徳山分校から本校の山口中学校四年に進学。山頭火と同級になる。

山口高等学校入学。「如月会」に入り、短歌に没頭。郷里に「紫南会」を作り文化活動に専念。

東京帝国大学文科大学哲学科（美学専攻）入学。同好の士と、俳諧に凝る。

同大学卒業。評論「真実なる人生と文芸の対境」（『帝國文学』）を発表。

処女作「鼯鼠（いたち）」（『帝國文学』）を発表。千葉県成田中学校の教師となり赴任。教頭に鈴木三重吉がおり、その影響を受ける。

「虻」（『ホトトギス』）が夏目漱石から『東京朝日新聞』の文芸欄で賞賛される。「山鳴」（『帝國文学』）を森田草平が同紙で推賞。

玖珂郡高森村（現・岩国市）の田村静子と結婚。『読売新聞』に「お絹」を連載。好評を得た。

青木健作夫妻、長男農一と三人で、富田新町の井本八之丞方へ養子として入籍（井本と改姓）。漱石の推薦で「梅雨の後」を『東京朝日新聞』に掲載。

雨の後」を『東京朝日新聞』に掲載。

成田中学校を辞して上京。日本大学中学校に勤めながら創作を続ける。『帝国文学』の編集に当たり、芥川龍之介の「羅生門」を世に出す。謡曲下懸玉生流の「清嘯会」に入会。その素謡会で初めて漱石の聲咳に接する。三重吉の『赤い鳥』の創刊に協力し「啄木鳥」等の童話を発表。

を公表。

「若き教師の悩み」を『読売新聞』に連載。それを天佑社から刊行。

日本大学中学校辞任。法政大学予科教授に就任。「錆びたる鋏」（『寸鉄』）を発表。

「鼻」（『ポエチカ』）を発表。関東大震災に遭うも、被災を免れる。

『層雲』を通して山頭火と旧交を温め、彼の句集の愛読者となる。従来の作品を精選して『青木健作短編集』を

春陽堂から刊行。
法政大学騒動が起こり、予科教授四十七人の一人として

連袂辭職。
法政大学文学部教授に就任。
『新講俳諧史』を育英書院

から刊行。
『椎の実』
（随筆集）を子文書房から刊行。

不治の眼病に罹る。俳句結社「無花果会」を起こす。患眼ますます悪化。自然の風光ほとんど生を隔つ。『落

『権』（句集）を刊行。

患眼に苦しみ、ほとんど失明に近い状態ながら、母校富田西小学校校歌を作詞。作曲は山田和男（NHK音響楽

団指揮者)になる名曲。成田中学校の教え子らにより、成田高等学校校庭に句碑建立。

「宿借るや更けて鴨鳴くいんば沼 健作」
『ひとりあるき』（随筆集）を刊行。

富田山崎八幡宮境内に「寒月や干潟に光るいかの甲
山人」の句碑建立。

静子夫人、肝臓癌のため死去。
2月6日、順天堂病院で、気管支炎のため死去。小平霊

園に静子夫人と共に眠る。遺骨の一部は、郷里周南市富田の争真寺境内、長女花野の墓に納められている。